

## あしよろ・ハードサポート通信

早いもので今年も残りあとわずかとなりました。足寄町は今のところ昨年同様に雪が少ない状況ですが、朝晩の冷え込みはこれから厳しくなっていきます。厳寒期は子牛の体調不良が心配ですね。今回は子牛の飼養環境についての話題です。

### ◆ まず、床

子牛の適温域は一般的に13℃～25℃と言われており、5℃を下回ると増体量や免疫力に悪影響が出る恐れがあります。しかしこれは子牛の寝床が乾いた清潔な状態での話であり、床が濡れている場合や床冷えが厳しい状況では環境が適温域でも子牛が「冷える」可能性があります。特に床がコンクリートの場合では厳寒期の冷えが強くなります。対策としては子牛の肢が隠れるくらいのたっぷりとした敷料を寝床に投入し、可能であれば敷料の下にスノコを設置することがおすすめです。スノコを設置すると床との間にすき間ができるので床冷えの緩和が期待できます。巡回している農場でも子牛の飼養スペースにスノコを設置した後、子牛の疾病発生率が大きく減少したケースもあります。この農場では掃除も楽になったと好評でした。



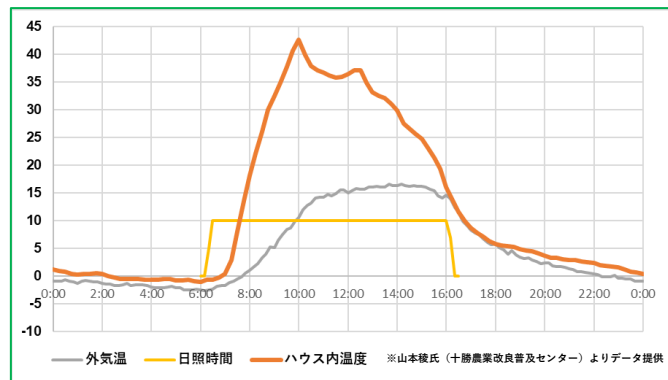
### ◆ 衛生管理も忘れずに

飼養環境の衛生管理も大切です。1頭の子牛がハッチを「卒園」して移動した後は必ずハッチを洗車機などで洗浄した後、乾燥、消毒を行って次に「入園」する子牛のための準備を行いましょう。スノコを設置している場合は一度天日に当てて乾燥させ、右の写真のように消石灰を塗布すると良いでしょう。もちろん、スノコの下の方も一度乾燥と消毒を行いましょう。最近では出生子牛を乾かして保温するカーブドームがありますが、こちらでも洗浄や消毒を怠ると子牛がカーブドームを通過するたびに体調を崩した事例がありますので、注意が必要です。



### ◆ ビニールハウス飼養では寒暖差に注意

一日の中で寒暖差が大きすぎると子牛の体調に悪影響を及ぼします。保温や悪天候時の作業効率のためにビニールハウス内にハッチを設置して子牛を飼養することがありますが、思いのほか寒暖差が大きくなる可能性があります。右のグラフは10月にある牧場でビニールハウス内の1日の温度を



連続して計測したものです。外気温は最高でも15°C強ですが、ビニールハウス内の最高温度は40°C以上になっていることがわかります。さらに、日中と朝晩との温度差も40°C以上になっています。ビニールハウス内での飼養を行う場合は、寒暖差を最小限にするために天候に応じて日中は開放できる部分を開け、外気を取り入れましょう。

### ◆ 厳寒期でも換気は必須

前述のビニールハウス飼養では特にそうですが、冬場は保温を優先するあまり子牛の飼養場所の空気がよどみがちです。空気中の細菌数が増えると呼吸器病のリスクが上がるため、子牛の飼養場所における換気はとても大切になります。右の写真は厳寒期で朝晩がマイナス20°C



以下になるアメリカの農場のもので、夜間でも哺育舎のカーテンを少し開けて換気を行っていました。通常の換気方法ではハッチやカーフペン内まで換気が行き届きにくいことから、最近ではダクトから常に新鮮な空気を緩やかに子牛へ送り続ける陽圧換気システムの導入事例が増えています。空気のよどみは目に見えずわかりにくいので、厳寒期以外でも子牛の体調不良が相次ぐ場合は換気状況を確認しましょう。

### ◆ 子牛の目線に立ってみる

子牛が体調を崩す原因は様々ですが、中には人からの目線では気づきにくい原因もあります。例えば、人が立って作業しているときは感じないアンモニア臭によって寝ている子牛が常にストレスを受けている場合があります。子牛が健康に育てもらうためには、時に子牛の目線に立ち、子牛の「意見」をくみ取ることも大切です。

(市川雷太)

